

算所の浅間行事 — 算所 —

ある年のことです。田植えも終り、梅雨時というのに大変な日照りが続き、せっかく植えた苗も枯れそうになり、お百姓さんたちは困りはてていました。

くる日もくる日も日照りのため、あちこちで水争いが起ってきました。

村人たちがケンカしていても雨は降って来ません。みんなで力を合わせてなんとか雨が降るようにと富士浅間神社の神さまに手を合わせました。

けれども若者たちは、元気があります。じっと折って待つばかりではいられなくなったのです。

若者たちは、立ち上がりました。そして、川底のみえかけているはらいがわ祓川で水ごりをとり、村の権現松までごんげんまつホラ貝を吹きながら「富士詣りふじまゐり道中宿歌どうちゆうやどるか」を唄いました。このさざぎで、村の人達が集まって来ました。





みんなで権現松を中心に輪をつくり、踊り出しました。若者たちは真剣になって再び祓川に入り、東の方富士を向いて「ノーマクサンマダバザラ……」

と唱え、続いて西の権現松に向かって「センゲ センゲ」

と言いながら水ごりをとったのでした。

そのあと、権現松に昇り竹のヘイを松に結び祈ったのです。

するとどうでしょう。めぐみの雨がどっと降ってきたのです。

若者たちの力強い願いが神様に通じたのです。

枯れかけた苗も生き返り、お百姓さんたちは喜んで田の草取りを始めました。

それからは、どんな大日照りでも、こうしてお祭りをすると、必ず雨が降るといい伝えられてきました。

これが、算所の浅間行事といわれ、毎年六月三十日に行なわれています。

キーワード：みんわ、算所、浅間行事、お祭

このお話は、昭和56年に発行された書籍『明和のみんわ』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしょうしています。